

## 第16回滋賀県子ども若者審議会 会議概要

- 1 日 時 令和3年12月3日(金) 10時00分～11時40分
- 2 場 所 大津合同庁舎7-B会議室
- 3 出席委員 池内正博委員、池田はるか委員、小野澤祐子委員、菊地美和子委員、  
静永賢瑞委員、高橋啓子委員、高山千穂委員、田辺英美委員、  
土田美世子委員、富長弘宣委員、野田正人委員、馬場貞子委員、  
山田宗寛委員、山本身江子委員、渡部雅之委員  
(五十音順)

### 4 議事内容

○ 開会

○ 出席委員数確認

出席委員数は15名であり、滋賀県子ども若者審議会規則第4条第3項に定める開催要件を満たしていることが事務局から報告された。

○ 子ども・青少年局長あいさつ

○ 資料の確認

#### (1) 淡海子ども・若者プラン取組状況と主要施策について

事務局から審議会の位置づけ、令和元年度および令和2年度の淡海子ども・若者プランの進捗状況等について説明。

#### 【委員発言】

(委員)

数値目標についてご説明頂いた。しっかりとは見られてないが、例えば、放課後等デイサービス事業所数については、令和2年時点で数値目標を達成できているが、質が課題になっていると思う。数値なのか、内容なのか、どちらを重視するのか。

(事務局)

(放課後等デイサービス事業所の)直接の所管ではないので、事業の詳細、方向性のお答えができないが、全体を通じて、数値で表せないところがどの事業にもあるので、数字だけでなく、その事業を取り組む中での課題や解決の方向性を、定量的・定性的両方の面で測っていきたいと考えている。

この審議会は、数字では測れないところを埋めていただくということで、足りないところなど、ご意見をいただけたらと思う。

(会長)

重要な質問だったと思う。数値はこうだが、内容や質は実際どうなのだろうということを、この後、各委員の立場から、子どもを見た実際の感触や課題などにフォーカシングしていきたい。

数値目標については、この時点でコロナの影響をどう考えるべきとか、ここはもうちょっと頑張らなければといったところを示すものと考えている。

## (2) コロナ禍における子ども・若者への影響などについて

事務局から配付資料(事前に委員から提出いただいた意見書および子ども関連のデータ)の位置づけを説明後、各委員から、コロナ禍における子ども・若者への影響などについて、御意見や情報を提供。各委員からの発言概要は次のとおり。

### 【委員発言】

(会長)

配付の資料は、コロナで審議会が延期となった際に、委員の皆様からいただいた御意見をまとめたものと、事務局から説明があったように、コロナとの因果関係を示すものということではなく、ここからの意見交換の参考として、このように変わってきているという状況を示すものであり、分析や解釈は委員の皆様委ねる、手持ちの資料という位置づけ。

時間も限られていることから、少し失礼な振り方になってしまうが、順番に発言をお願いしたい。

(委員)

1点、気づいたことをお話しする。コロナ禍で子どもたちの対面の機会が減ってきている。この影響が長期的にどうなのかということを提言しておきたい。

今は特に問題を抱えていない子どもも、成長過程であり、ソーシャルスキルの獲得や対人関係など様々な学習を対面ですべき時期だが、それが不十分な状態。これが1年2年と続いていることの影響が長期的に出でこないかが少し心配である。杞憂に終わるかもしれないが。

SSW(スクールソーシャルワーカー)やSC(スクールカウンセラー)は、問題が起こった時に入っ  
て対応してもらって役割と考えられているのだろうと思うが、見方を少し変えてもらい、こういった方は一次支援にも優れた能力を持っていると思うので、もっと積極的にソーシャルスキル・トレーニングやストレスマネジメントなども広く身に付けてもらうことを考えてもいいのではないかと。

(委員)

生活を中心に、家庭教育に重きを置いて考えている。日常生活のコロナ禍でのあまりの変化に、

価値観の教育に大変心配を感じている。ITをうまく使うことで、便利、手早いを優先してしまって、家庭内でお小遣いやお手伝いの対価など、働く意味があってお金を稼ぐことが日常生活の暮らしの中にあるからこそ、学べ、体験し、得られた、金銭感覚の教育が、今の「見えない現金化」の中で、どのように意欲として育てていくのか。家庭教育の衰退といわれている中で、どのように地域の方へ知らせたり、実体験として現場で伝えていけばいいのか、知恵を頂きたい。

(委員)

コロナ禍の中で、施設での暮らし、里親家庭も含めて、どうしても制限を受けるということが非常にあり、実際に施設でコロナの発生もあった。そうすると、子どもたちは、2週間だけではなく、その後にも発生が確認されると1ヶ月近くの間、ホームから出られなくなる。それだけでも大変だが、人との繋がり方が変わってしまう。面会や面接ができなくなり、親子が会えない。家庭復帰を前提に続けていたのを止めざるを得ない。見えないところの影響がある。繋がりが変わるということは、施設で暮らす子どもたちにとって影響が大きかったと感じている。

それと、今回の緊急事態宣言が4月だったので、学校の入学と同時に学校へ行けなくなってしまい、在籍している子どもが退学してしまう、という影響があった。人との関わりになかなか慣れない人では、6月、7月から行くというのが、しんどいところもあった。

積極的なところで申し上げますと、コロナ時に、風評被害を受けた施設もあった。コロナは発生していないが、疑われるといったことなどもあったが、県民の皆さんからの応援が今まで以上にあり、マスクを送ってもらったりと、施設で暮らしている子どもたちのことを考えてくださっているんだなと感じた。支援はすごく手厚くなり、いろいろな企業・団体も含めて、コロナ禍だからということで、たくさんの支援もあったということも併せて報告させていただきたい。

(会長)

これだけは社会的に必要なものではないのか、社会的にこういうものを作ってもらえると非常に助かるといった御意見はあるか。

(委員)

贅沢を言うとたくさんあるが、やはり基本は6人で生活しており、そこに1人感染者が出ると、全部に広がるというリスクを抱えている。小学生、中学生の子どももいるので、そうした子どもの生活も含めた医療ケア。幸い発症した子どもは、県立病院で心理的なケアも含めて手厚く対応してもらえた。そういうことが社会的養護にかかわらず必要かと思っている。

(委員)

コロナで、子どもに関わる方々に頑張っただけで、いろいろな指標を見ると、ストレートにコロナの影響というより、その前から起こっている状態がそのまま続いている。ただ、個別で見ると、やはりコロナは大きく子どもたちを分断しているというか、もともと困難な子どもたちはより困難になる一方、子どもも親も家にいて、とても楽しい時間を過ごしている家庭もある。

コロナ禍も含めて、今、困難を抱えている子どもたちに、何がしんどいのかということも含めてしっかりと見ていく。そういう仕掛けの、より充実が必要なのだろう。先ほど委員の御発言があった、質の問題ということは重要だと思うし、数値目標だけではなく、課題として文書で書いてもらっているのはすごくいいと思う。その部分を次のステージで、どう解決しようとしているのか。何が課題であるということを示していただいているので、その上で、次はどうかということ。

それから、ちょっと教育委員会には失礼かもしれないが、例えば滋賀県の学力は全国最低水準。最低といっても順位付けの方がおかしいくらいの差でしかなくて、点数にこだわることよりも、得ているものがあるかもしれない。例えば、秋田県は全国で断トツに成績が良いが、大学進学率は全国45位。あるいはこの間に、全国学力テスト上の数値は伸ばしたが、あわせて不登校も増えたということも聞く。数値に着目しすぎて、そこだけを頑張った時に、全体で見るとおかしくなる可能性がある。そのようなことも見ながら、そういう意味では、この委員会では一体的に見る営みを丁寧にやっていただいております、先ほどのように課題が出てくるというのはいいことだなと思っています。

そうはいても、ちょっと気になっている数字が自殺の増加。全国的にも同じ傾向で自殺が増えているが、全くサインがないのではなくて、今までならリストカットで止まっていた子が、そこを抜けて死に至る。悩ましいと思うのは、10代後半から20代の子ども・若者の死亡原因の第1位が自殺。逆にいうと、それだけしんどい子ども、悩んでいる子どもたちがいる。そうすると、先ほど委員がおっしゃっていた、実際にしんどくて何かサインを出している子どもだけではなくて、もっと手前のところ、ちょっとしんどさを示しはじめていて、サインが出ているところでやることと、深刻なので、もっと専門性の高い方々を投入してしっかりと支えなきゃいけないこと、そのメリハリをつけながらやる必要がある。滋賀県のスクールカウンセラーの勤務時間というのは、近接他県に比べて半分ぐらいしかない。時間の配置の建付けの問題。そういう中でも、どの役割を担うかというところは悩ましい問題だと思う。

それからもう一つ、これも全国傾向だが、小学校の校内暴力が増えている。全国の非行は激減している。昭和50年代は40万件ぐらいの非行が今、4万件を切っており、10分の1以下。ところが、小学校の校内暴力は、全国レベルでこの15年で20倍ぐらいに増えている。先ほどあった価値観、或いは規範意識もあるし、一方で全員が暴れているわけではないので、個別にしんどい子どもたちの要因はなにか。そこでサインを出してくれているので、アセスメントが大事。しっかり見極めて、有効な手だてにつなげていくことが重要。

それから、滋賀県で、この間の子ども・若者育成の関係で、滋賀県の引きこもりの子どもについて、推計は時々出ているが、どういう方向になっているのか。各市町村にまだまだ十分、子ども・

若者育成の支援システムが成熟していないように思うので、概数が分かれば教えていただきたい。

あと1点。最近の話題の言葉としてちょっとありがたいことと迷惑なことがある。ヤングケアラーという言葉で、この会議にも関わる。広い意味でしんどさを抱えた子どもを見つけ出すという意味では良いが、児童福祉法や虐待防止法の中には要支援児童、要保護児童の支援体制があり、世の中でヤングケアラーと言っている方々の多くは、例えば要対協など、現在の建付けを知らないまま、日本にはヤングケアラーを支える仕組みがないから何か作らないといけないとなっている。もともと児童虐待の考え方は日本固有のものに加えて、アメリカのシステムを導入している。そこにヤングケアラーという1980年代ぐらいに始まったイギリス型のサポートシステムを入れると、多分現場は混乱する。困難性の高い子どもに関しては、先ほど言った、アセスメント、連携ということがしっかり体制として必要。一つの機関だけで抱え込んで出来ることではない。

(会長)

トータル的に保護に焦点の当たったご意見をいただいた。私自身、ヤングケアラーという言葉が広がってしまって、イメージとしてとらまえている部分があるので、これから議論を広めたり、実効性を考えていくのだろうと思う。

アセスメントの共有。例えばスクールカウンセラーだけ、学校現場だけ、というのでは難しく、一人の子どもに焦点を当てて、それぞれのところが専門的にアセスメントして、一体化していくことが必要ではないか。

(委員)

青年団という団体が、地域の中で少なくなっている。青少年関係団体、いろいろな子ども会などと交流させていただいているが、20代の青年というのが社会の中で一番見えてきづらい部分かなと思う。学校から卒業して、一人前の大人として見られながらも、まだまだこれから成長していかなければならない年代が、20代の若者、青年と呼ばれる世代。この青年層の中でどのような経験を積めるかが、すごく大事なんだろうと思っている。この青年層が、子ども達とかかわっていく次世代の担い手になっていくと思うので、ここで自分たちがどのような実感を持って、何が大事だということに気づけるかどうか、これからの子どもの関わりであったり、数字の見えない部分で、すごく大事かなと思う。

コロナ禍になって、一番大打撃だったことは活動が止まったこと。活動が止まったことによって何が起きたかという、一つは、失敗をしてからの立ち上がり方を経験できない子がすごく多くなっている。中止になったらそこでストップしてしまうが、今までの過程の成果を出す場がない。成功体験を得る場もないし、失敗したとしても、次からこうやったらいいという振り返りの場もないということがとても大きく、最初、とても積極的に前向きに活動しようとしていた青年たちもだんだん失敗するのが怖いから参加するだけの立場の方がいいと、自分たちが企画するのではなく、どこか

用意されている場に参加して経験することが大事なんだという価値観に変わりつつある。きっと自分たちが企画をする側になって、こういったことが大事なんだよということを周りに発信できるような経験をこの時期に積めることが一番大事かなと思う。

また、コロナ禍で「ステイホーム」という言葉がずっと言われている中で、やはり家庭と仕事にしか居場所がないということもすごく大きな問題になっていたかなと思う。地域活動であったり、青少年活動している子たちは、コロナ禍であっても、第三の居場所があって、何か子育てに困ったときに必ず相談できる場が家族・仕事場以外にある。これはすごく大きいかなと思っている。ただ、そういう活動に参加している若者は全体的に少ないし、なかなか掬い上げられていない青年層に対して何ができるか。難しいが、これから子育てであったり、いろんな現場、最前線に立っていく世代だと思うので、そこに何を打てるのかということがすごく大事かなと思う。

一つ思っていることとしては、もっと青少年活動であったり、地域活動ということを募集していただくと大変ありがたい。青年達も自分たちで考えて活動していく力はあるので、ただそれが状況によって、結果的にできない。達成できないという経験を味わわせるのではなく、失敗したとしても、何かができるんだという経験を詰めるような場所を保証されているということがすごく大事かなと思うので、なかなか数字には出てこない部分だと思うが、ぜひ、これからそういった場が保証されるようなことが続いていけばありがたいかなと思っている。具体的な解決は自分もまだまだ経験が乏しいので、「これだ！」というのは分からないが、青年層の目線からなかなか見えてこない部分かなと思うので、意見を述べさせていただいた。

(会長)

失敗して立ち上がることができない子どもたちの環境というのは、傷つきやすさというのも多少あるのかなとは思いますが、何が必要なのか。小さいころ、自転車の練習を思い出すと、後ろで誰かが転んだときに支えてくれる、危ないときに持っていてくれるという信頼のうえで、一人で走っていきたりするもので、社会に学校と家庭、職場だけでなく、それ以外の居場所があるとよい。この後の他の委員の意見からも出てくると思うので、委員同士の意見交換もしていただきたい。

(委員)

資料15ページの「家族と過ごす時間」を見ていて、時間が増えていてそれを保ちたいというのはすばらしいと思ってみていたが、これは子を持つ親の意見であり、子どもの視点の意見を聞いてみたいと思った。今まで家庭でしんどかった子たちは、かなりしんどい状況になっている。そうでなかった子も、しんどいのでは？と感じることがあった。そういう意見を聞いてみたいし、そのような機会があれば確保していただきたいと思う。

もう1点、放課後デイについて。マスクが嫌なお子さんがあるが、マスクをすることが生理的にだめであったり、できない子どもに対して、世間の目が冷たく、悩んでいる保護者がいる。集団圧力

になるのは、やはりおかしい。一人ひとりが権利を守られて、滋賀県で幸せに暮らせる状況をつくるために、個別の事情を抱えていることを忘れずに、本審議会や計画策定に関わらせていただきたい。

(会長)

他委員から子どもの分断という御発言があったが、経済など大人の社会も分断されており、これが顕著になっていっている状況が、子どもにも反映しているのではないかと。幅広く捉えて考えていきたい。

(委員)

乳幼児健診や妊婦支援をしているが、コロナになって、出産のときはお母さんだけでお父さんが立ち会えない。また、生まれてからは、コロナが心配で小さい内は家の中にとじこもっていて、支援センターに行ったらどうかと思う方もたくさんいらっしゃるが、やはりコロナが怖いから、家で子どもとお母さんと2人で過ごしている家族が多い。あと、遠くから嫁いできている方は繋がれない。乳幼児検診も、今までは集団で、同じ年齢の子の様子をみたり、お母さん同士の交流もあったが、今は必要な検診を受けてもらうだけで精一杯の状況で、繋がりが減ってきている。

子ども達を支える保護者も大変な中で、子育てをしているんだなと感じている。コロナでマスクをしながら、表情がお互い見えない中で、どのように寄り添って支援していけばいいか考えている。

自分の子ども達の様子を見ていて、動物園や水族館、いろいろなイベントに行けなくて、成長の中でこんな経験をしたらいいなという示唆を与えている。貴重な体験がしにくいし、その中で、大人もストレスを溜めている。どのように寄り添っていけばよいか考えなといけないし、どのように繋いで支援していけばいいのか、一緒に考えていくことを一人ひとりが意識していくことが大事だと思っている。

(会長)

保健所を訪問した際、濃厚接触者への聞き取りをされていて、電話混線、毎日残業という状況で、影響をすごく受けていたと思う。地域密着型としての現場はどのような状況であったか。

(委員)

地域の方と直接接する機会は多かったが、コロナ患者に直接支援はなかった。地域で多くの方と出会いながら、コロナの影響をひしひしと感じていた。

(会長)

情報が、すぐく入るところと入りにくいところがある。情報が入りにくいところがあると認識できていないと、置き去りになることがあると思う。

(委員)

コロナによる影響という、園はいろいろな対策をしているが、子どもは3密、密集・密接をさけてはいられない。それありが保育なので、保護者の理解を得ながら進めているが、怖い、危険なところがあったかなと思う。保護者は、生活が懸かっており、働かざるを得ない方は預けに来てくれたが、一方、大変心配され、園でのマスクの着用や手指消毒を求める方もおられ、そのはざま、園はこういうところなので、このように子どもを育てていますということを伝えている。

行事ごと昨年度は中止していたことが往々にあったが、それではだめなので、良い意味では行事の見直しができる、出来るやり方でしょうと見直している。必要なものが必要な状態でできるように話し合いながら、見直す機会になっている。

マスクの生活なので、子どもが大人の表情が読みづらい。食事の時は、マスクを外すが、黙食。今までは、食事中に保育室に行って声かけをしていたが、子どもたちに「しっ！」と注意される。とても悲しくて、本当は食事の時間は、午前中の出来事や帰ってからの約束など、人と繋がる大事な機会。大人の社会でも同じようになっている。

コロナに関係なく、こども園化が進んでいる。働く親を支援するという社会的な方向。祖父母世代がまだ働くので、若いお母さんは、就労と子育ての両立がなかなか難しい。園の職員も、子どもが病気になった時に祖父母に頼んで自分が休むことができない。子育て世代の就労継続が難しくなっているのが気になっている。

保育園利用の家庭が増えていて、それで働けているということもあるが、家庭教育がおろそかになってはだめだと思う。そこが弱まってきている。逆に厳しすぎて家庭で子どもが委縮し、それを外で発散するという子も増えてきている。自分の思っていることを素直に表現できる、安心した場が家庭であるはずなのに、それが園であったり。それを受け止めるのも園としてしないといけな

いが。  
また、PTA組織から外れる園が多くなってきている。そういう活動をしている暇がない親が多くなってきており、就学前の園では、課題の一つになってきている。

(会長)

子どもだけでなく、保護者も多様化してきている。コロナの感染では風評被害もあつたり、保育士も大変。定着できないという問題もあつて、何か新しくこういうものがあればという御意見があ



ればきかせていただきたい。

(委員)

他の園の状況も聞き、コロナの状況で、どうだったのかということをもつにまとめた。

1点目。どの園でも保育士は感染してはならないという意識が強い。園は感染者を出してはならない。この緊張感の継続が強いられていると大変しんどいというのが現場の思い。特に就労する保護者への影響を考えた上での保育園の立場かなと思う。

2点目。マスクやフェイスシールドなどをつけて子どもたちに接し、さらに検温、おもちゃの消毒、換気の徹底、給食時のパーテーション設置、物品の配置、食事・昼寝時のソーシャルディスタンスの確保など、今までと違うような保育をするという気遣いにも体力を消耗する。

3点目。予定していた園行事の修正や変更、中止といったことで、今まで通りの行事の見直しもなった。これは少し肯定的な意見。

4点目。登園の自粛期間は、子どもの人数が減ったために、通常よりきめ細やかな保育ができたという意見。国が定めている保育士配置の基準は保育の質の上で良くないのではないかなとも思う。子どもが少なければ、それなりにしっかり保育ができるという気づきがあった。

5点目。先ほどソーシャルディスタンスと申したが、愛着を大切にするのが保育園なので、距離を置いて、正反対の感染対策しなければならぬ矛盾。本来、すぐに抱き上げてあげないといけないのに、人との距離をとりましょうと言いながら保育をするという矛盾点を感じている園もある。

6点目。感染対策予防のマスク着用等が、子どもにとっては特に表情がわかりにくい。これが、今後どのように子どもに影響するのか。専門家でないのでわからないが、北九州の新聞に、子どもの発語があまりよくないということが掲載されていた。保育士、大人の口の様子がわからないのは、やはり乳児には影響するんじゃないか、発語に関わってくるんじゃないかという不安の声もあった。以上6点が、コロナにおける保育園での子どもへの影響かなと思っている。

それと、今後の期待について。先ほど他の委員もおっしゃっていたが、数字上で表すことも大事だが、その数字の裏に隠れている影響は、まだ見えない部分がある。特に保育園、こども園の利用者数が増えてきているが、同じ市町の中でも待機児童を抱えている地域もあれば、減少している地域もあるし、人口減少社会を迎えるにあたって、いかに社会福祉施設、児童福祉施設の機能を安定的に残していけるか、今後、滋賀県においても考えていただけないかなと考えている。

それからもう1点。最近、特に年長児、就学前の子ども姿を見ていると、どうも精神的に弱い。知的能力は高いのかもしれないが、精神的に弱い子が多い。なぜかと疑問に思いながら、日々保育しているが、やはり体験・経験が少ないのかなと。山登りしても触ってはいけない漆にも手を出してしまう。体験活動が少ない。もちろん、社会の問題だけではなくて、家庭での教育も欠損しているのではないかな。

今後、人生100年時代を迎えることを想定するなら、もっとゆったりと成長していくというのが、今後の人間の社会スタイルなのかなと思う。5歳で終わって小学校に行くのではなくて、さらにも

う1年しっかりと社会生活の基盤となる保育園生活をして、そのあと小学校へいく。今までの6・3・3・4年制にも関わる壮大なスケールの話になるが、小学校へ送り出すときに、この子はもう1年保育園で経験した方がいいなと思うことを考えると、また、100年時代をゆったりと過ごしていこうということを観点にいれると、人それぞれの成長過程に合わせて、段階を踏まえて学校へ送り出していこうような社会になっていけばうれしいと思う。無理やり通常級に行くか、通級の方に行くか、と言いながら小学校へ送り出す矛盾がある。誰がそれを判断するかという難しさはあるが、子ども1人の姿の中で「小学校へ行ってよらしい」と送り出すのが本来の姿と思うと、学年で区切るという難しさを最近、感じている。せめて半年、9月の入学でもいいんじゃないかと個人的に思っている。

(会長)

子どもの数が少ないと細やかに保育ができることなど、現場からの様々な意見を聞かせていただいた。保育士もかなり養成しているものの現場から離れていく人がいるなど、課題が多い。

(委員)

コロナになり、民生委員の活動も訪問しないようにしようとなった。民生委員の仕事は、子育ての方や高齢者の方、困っておられる方のいろいろな悩みを聞き、その内容によって専門機関につなぐ役目。専門の資格があるわけではなく、ボランティアの立場でやっている。

今までやっていた「赤ちゃんサロン」、出産したお母さんや赤ちゃんが集まる、公民館で行う催しも全部中止にした。今年も新聞やニュースを見ながら開催したり、赤ちゃん訪問という出生してから4ヶ月以内に訪問する仕組みについて、助産師は訪問が義務づけられているが、自治体から委託を受けて訪問している民生委員は、中止になったり、ポスティングになった。民生委員の正直な気持ちは、やっぱり対面して話をするのが一番いいと思うが、行政はコロナにかかった方が増えてくると、ポスティングにしてくださいという一点張りになる。

行政にはいろいろな入れ物があるが、その隙間に必ず落ちてしまう方がいて、そういう方が民生委員のところへ来る。コロナになってすごく変わったのは、大学や専門学校に入学した方が、社会福祉協議会の生活福祉貸付金制度を利用するケースが自分の担当区はすごく多い。生活資金ではなく、教育資金を借りている人が去年よりさらに増えたという実態がある。

それから、部活がなくなって子どもが肥満になった、また、コロナで保育園に通えない間にYoutubeを見て、そういう影響で視力がすごく悪くなったという話を聞いている。

また、他委員の御発言にあったコロナ以前からの課題を、すごく感じている。子どもは保育園、幼稚園や小学校へあがっていき、集団生活を経験する場に入る。家庭と行ったり来たりするが、地域で育つということはずっと言われているが、今はそのことが飛んでしまっているように感じる。コロナになってすごく感じるのは、子どもに自由がない、ゆとりがなくなっているということ。地域でも公園や広場で、コロナになる前は高齢者がグランドゴルフをしていて、子どもはどこへいった

のということが前から言われている。地域で見えない。

民生委員に、ヤングケアラーの実態調査がきたり、引きこもりは何人いるかと聞かれる。今回も資料はあるが、実態をどれだけ掴んでいるかすごく疑問。たくさんのお金を借りて、これから社会に出る準備をしている時に、身体を使わない、コミュニケーション力がすごく低いというかねてからの問題もある中、コロナで極端にあれもダメ、これもダメとカットされていて、子どもが地域で居場所がないことが、これから先、何年か経ってから問題が出てくるのではないか。公民館でも自然体験教室の予算がなくなり、また、コロナが広がるとイベントも中止され、自然体験する機会も奪われている。子育てで悩んでいる方から言われたのは、子どもは私達が思っている以上に気を使っている。管理しているつもりはなくても、長く幼稚園や保育園にいて、家に帰ったら親に気を使っており、息抜きできる場所がない。地域での居場所や関わる人が活動する場を行政でどのようにしたら作ってもらえるのか。空き家探しなど新聞に出るが、すごく難しい。

(委員)

学校は密を作るところなので、密を作るなどと言われるのが一番困っていた。机上の学習が多くなり、体験し心を動かす行事がどんどん出来なくなってしまった2年であり、10月に緊急事態宣言が終わってからは、急ぐように一杯取り戻している。10月、11月は本当に地域の方、保護者にご協力いただきながら、身体を動かして、めいっぱい活動しているという現状。

今、思っているのが、コロナ禍だからか、しんどさを抱えている子どもが年々多くなっている。しんどさを抱えている子どもが多いということは、しんどさを抱える保護者が多くなっている。そのしんどさは個々によって違う。この子は何でしんどさを感じているのかな、とアセスメントする力というのは、教職員に求められているなどというのを強く思う。

そして学校だけではもうどうにもならない問題がたくさんある。関係機関にいっぱい繋いでいるのが学校だが、ソーシャルスクールワーカー、カウンセラーが常駐していない。中学校に常駐しているので、中学校の空いている時間に来てもらうが、中学校で(勤務)時間いっぱい、小学校へは行けないと言われることもある。これだけ多様化して悩んでいる子が増えている中、小学校も専門性を担任がつけていかなければならないが、担任は日ごろの授業で夜遅くまで頑張っている状況なので、専門の関係機関との連携が深められたらと思う。常駐する専門の方がいればなと思っています。

核家族の家庭も多く、祖父母の知恵も借りられない現状を思いながら、繋がりを大事に学校運営していかないといけないなと思っています。

(委員)

授業のオンライン化と将来の夢について発言させて頂きたい。

まず授業のオンライン化について。家はやはり学習に特化した場所ではないので、戸惑ってい

る学生も周りでは多かったように思う。授業の時間が兄弟姉妹と重なってパソコンが使えず、どちらかがスマートフォンで授業を受けなければならない状況も発生していた。

その一方で、お母さんの介護で休学しなければならなかった子が、オンライン化により休校せずに授業を受けられたとっていたことが印象的だったので、このような制度が残っていたらいいなと思う。ただ、その子が6月ぐらいになったら「しんどい」と、泣きながら電話をかけてきて、今までは大学に行く普通の大学生でいられて、その時間が息抜きの時間になっていたが、ずっと家にいて逃げる場所がないと訴えていたのも印象的だった。良いことがある一方で、支援の手が他のところから回らないといけないなと感じた。

またオンライン授業は、ZOOM を使うことが多いと思うが、グループワークをする際に、学校では教授の先生が巡回し、発言していない子にも発言するように促してくれていたのが、ブレイクアウトルームだと同じ人ばかり発言してしまい、グループダイナミクスが生まれることがなく、オンライン授業の問題かなと感じた。

次に将来の夢について。インターンがなくなったり、説明会がなくなったり、WEB になったり、中学生の職場体験も中止になったと聞いた。将来の夢や、夢につながらなくても憧れを持つ機会が少なくなったと思う。自分は、中学生の時に子ども県議会議員に参加し、一人すごく憧れる職員がいた。憧れを持つ機会というのが奪われているんじゃないかと不安に感じている。

部活が禁止になったので体力が落ちている子どもが増えているんじゃないかと気になっている。すぐに出てくるものではないと思うが、体力が落ちてしまったことがロコモの子どもが増えることにつながるの心配なので、比較する統計があっても良いのではと思っている。

#### (委員)

働く立場から見ると、コロナでテレワークになって、家にいて子どもの面倒をみてということもあるが、現実には仕事に追われていると、子どもが騒ぐと「うるさいなあ」となって、そういった様々な相談が来る。ひとり親のDVということもあるので、子どもの虐待も含めて大きな課題だろうと思っている。

昔は地域の方が子どもをよく見てくれていた。あの子はどこの子やなあ、外で悪いことをすればそこで叱ってもらえた。今はなかなか、子どもも外に出ていないし、どこの子かも分からない。注意をしたら、逆に自分が怖いなど注意もできない。地域でどう守り育てていくべきなのか、今後考えていく必要があるだろうと思う。

働く側で言うと、緊急事態宣言が出てから、こども園に預けたりということもあるが、子ども食堂が開いてもらえない。これも大きな課題だろうと思う。

県から言うと、こども園や保育園の運営は、市町の役割ということだと思うが、どこの市町も同じように対応をとれているのかということ、市町間でばらつきがある。県として、一定のところ、しっかりと施策ができていないのか確認してもらう必要がある。先ほどもあったように、数だけでなく中身を含めて。それは、県でしかできないと思う。良い取り組みをしているところは、率先して吸い

上げて、情報共有しながら進めてほしい。

(委員)

子どもの貧困対策として学校や福祉関係との連携があげられているが、訪問することでその家庭の状況などが見えてきたものが、コロナによって訪問が難しくなってきた。今後、どのような形で家庭との関係、連携・アセスメントが大切ということを考えていくのが、行政の課題だと思っている。

### (3) その他

県取組について紹介(リーフレット等配付)

- 事務局から事務連絡
- 子ども・青少年局局長あいさつ
- 閉会